

平成 16 年 12 月 22 日（水） 総務警察委員長報告（高見澤副委員長）

【報告要旨】

総務警察委員会に付託された議案審査の結果について報告する。

山口村の越県合併に関する「議第 18 号 県の境界にわたる市村の廃置分合について」及び「議第 19 号 県の境界にわたる市村の廃置分合に伴う財産処分に関する協議」については、慎重審査の結果、原案どおり可決すべきものと決定した。

山口村の越県合併に関しては、既に委員会として 10 月 22 日に総務省へ法令確認等のための現地調査を行い、11 月 4 日、5 日には山口村、中津川市への現地調査を行い、村と市の医療、教育、商工業、農業、更には廃棄物処理等の状況をつぶさに視察した。

審査の過程においては、これらの調査事実を踏まえ、更に本日は提案者の宮澤敏文議員から議題に関連して概況説明を受け、参考人として山口村長、村議会議長、教育長、中津川市長、中津川市議会議長の 5 名から今までの取り組みや熱い思いと変わらぬ固い意思等を再確認した。特に宮澤議員からは合併関連議案の議員提出にかかる総務省の公式見解の確認方法や、村の財政シミュレーションの正当性等の説明があり、また中津川市長からは新生中津川市が誕生した際の新市の連携を見据えた、力強い心構えの表明があった。

これらを踏まえ、慎重審査の結果、全員一致で可決すべきものと決定した。

質疑（あおぞら）

質問者：北山議員

【質問要旨】

午前中、初恋、木曽牛の銘柄が変わりブランドが消えることへの不安を解消してほしいとの要望が委員からあった。今日の新聞の投書欄に「合併に際して固有の伝統文化、歴史を持つそれぞれの地域がその郷土色をどのように保ち共有するか、合併後のビジョンが十分見えない状況に危惧を感じる。後世に残すべきものを広い視野で検討し、具体的な手立てを講じる必要がある。」とあった。初恋、木曽牛、木曽ひのきなど、先人が築き上げてきたブランドをどう後世に残していくのか。また馬籠宿、藤村記念館などの歴史文化を広い視野に立ってどのようにいつくしみ残していくのか。さらには恵北 6 町村も含む中津川市 8 万 5 千人との合併の中で、2 千人の山口村は人口割合で 4 2 分の 1 となってしまう山口村の将来について小さくてもきらりと輝く地域であり続けるための具体的な手立てについて午後の委員会ではどのような質疑応答がなされたのか。

【高見澤副委員長答弁】

木曽の牛など農産物等のブランド、木曽の文化等どうするかとの質問だが、それぞれの委員からの質問の中にもあり、加藤村長、大山市長からも回答を得ている。新しい地域の村創り委員会等と共に地域づくりのためにそれぞれ新しい未来志向に向けての意向をしっかりと反映させていくという言葉の中に答えは十分含まれていると考える。

質疑（あおぞら）

質問者：北山議員

**【質問要旨】**

特例債は合併の目的かという質問に対し、加藤村長は特例債は特例法に付随したものと答弁があった。国と地方を合計した債務残高は、2005年度末で774兆円であり、2004年度末に比べ34兆円増加し、国民一人当たり606万円の借金を抱える計算である。箱物や公園、道路建設などに使い道が限定された合併特例債は、この借金をさらに増やすものとして国民の間で危惧されている。合併後の中津川市は一体いくらの特例債を何に使うか。また、その中で山口村に向けられるものはいくらで、何に使われるのか。これについて、午後の質疑の中にはあったのか。

また、村長は国の推し進める大合併がなければ、またもし単独でやっていけるなら、どこの市町村も今のままでよいだろう述べている。午前中の本会議質疑の中で、提案者の宮沢委員は財政力指数坂城町0.671などの例をあげ、比べて財政力の低い山口村は苦渋の選択として合併を選んだとの話があった。平成14年度の山口村の財政力指数は0.153と県下103位と確かに低いが、自立を決めた泰阜村は0.143、県境で自立の栄村0.121、売木村は0.104、根羽村に至っては0.101と後ろから3番目であり、なぜ、同じような状況にありながら片や自立で片や合併なのか、県境の村調査をやってきた私ですら、今でもよくわからない。村の合併だよりのいたるところに自立は住民に相当な我慢を強いること、村独自の事業はできず、最終的に役場は窓口業務を行うだけになるとの説明がされているが、本気で自立を模索し村民に示してきたのかということについて午後の質疑応答の中にあったか。

さらに、村民から疑問の声が上がっている合併シミュレーションについて、職員や特別職の人件費は現在カットしているものを元に戻して算出したため増えていると午前中に村長から答弁があったが、現在より財政状況が悪化する中でのシミュレーションとしてはおかしいのではないかという質疑や応答はあったか。

**【高見澤副委員長答弁】**

特例債を何に使うかというご質問は、新しい中津川市の問題であり、それら詳しいことは新しい市の問題である。

財政力指数等の件については、これは各委員が全て以前に確認をし、承知をしての議論の結果であろうというふうに考えている。

質疑（あおぞら）

質問者：北山議員

**【質問要旨】**

長野県議が国のお墨付きをもらって、他の県へ送り出すという異常性、悲劇は何とかならないかという県民の声が寄せられている。午前中の委員会の審査は、手続論に終始しているかのようには思えた。20日の議会運営委員会で古田議長は歴史の検証に耐えうる議論の必要性を述べられたが、果たして午後の委員会では歴史の検証に耐えうる議論がなされたのか。

【高見澤副委員長答弁】

歴史の検証をどのようにしたかということだが、それは、本日まで本定例会が会期を延長してまでもやってきたということに尽きるかと思う。また、昨日、議員提案の可否についても提案者から説明があり、その中に十分含まれていると思う。

質疑（トライアルしなの）

質問者：今井議員

【質問要旨】

旧神坂村が別れて中津川市とそして長野県の山口村の方に別れ、当時、1,600人という3分の2の数が長野県から中津川の神坂に行ったが、今、千人をきった。もちろん、過去の歴史を検証していくときに、長野県側の神坂の方が微増で、同じような数になってきていると聞いている。また、岐阜県に行った神坂小学校は、当時400人だった生徒が、来年は1,2名が入学と聞いている。このように周辺地区が人口的に寂れるということについて、田舎を守っていく、森林を守っていくことが、人口ももちろん大事ですけれど、一局集中していくことがきちんと守れるのかどうかということについて議論がどのようにされたのか。

それから、神坂の幼稚園が無くなり、新しい神坂小学校が無くなる。そして、山口中学校が無くなっていく。これについての質問、理由等どのように説明されたのか。また、14年度、山口中学校の生徒のアンケート結果について、越県合併反対が多数であったと聞いているが、その説明があったか。

3点目、民主的に行われたと言われている越県合併の説明会だが、113回と回数は多いが、少数単位すぎて発言ができず、もっと大きい単位でやってほしいと希望を何度も出したが、なかなか聞いてもらえなかったという意見があったが、村長から説明があったかどうか。

4点目、農協、育苗センター、郵便局、駐在所、役場、消防団が無くなるかもしれない。議会も12名が平成22年まで1名で、その後はどのようになるか分からない。診療所は12月21日で無くなっている。このような状況の中で、中津川に行けばこれは解消されるわけではなく、このような状況が続くわけだが、この点について質疑があったか。

山口村のみならず、県全体の枠組み、県をどのようにしていくのかということについて、総務委員会でどのように議論されたのか。

【高見澤副委員長答弁】

中津川市、神坂村等の問題については、過去の歴史や悲しい記録を繰り返してはいけないという認識を委員全体がした上で議論を重ねてきた。

中学生のアンケート等の説明については、あえて議論の対象にはしなかった。

民主的に行われたか等の問題は、やはり意向調査の結果を尊重すべきである。

質疑（トライアルしなの）

質問者：今井議員

**【質問要旨】**

長野県の枠組みについてどのように、総務委員会でどのように話し合われたのか。

農協、育苗センター等、郵便局、駐在所等、こういうものが無くなっていくということについて総務委員会の中ではどのような質問がされ、お答えがあったのかということを知りたい。

この木曽山系にへばりついた山口村は小さな村だが歴史、文化の固有性、心に繋がる観光を目指している。そして文化と観光を今以上に効果的につなげて、村民がそれぞれ食べられればいい、この村でこのまま信州の南の玄関口として存在したいと願っている人たちおり、この人たちは今回の合併議論を機に、中津川市と実施されている広域連合、一部事務組合の更なる拡充と、買い物と学校と病院だけでなく、市、村民レベルの文化交流も、村であっても市であっても深くしていきたい。そのような人たちの心についても、総務委員会の中で話し合いがなされたのかどうか。

**【高見澤副委員長答弁】**

木曽路ということでは長野県と山口村が中津川市に行っても一地域という形の中で、委員会の中でも審査の中で議論している。

質疑（トライアルしなの）

質問者：今井議員

**【質問要旨】**

山口村は昭和の大合併で分村、越県されたということがあった。村は40年経ってようやく一つになった。そこにこの越県合併、俺達の40年はいったいなんだったのかと、集会で同年輩の村民に詰め寄られる村会議員もいると聞いている。このような現状について村長から説明があったのか。

まだ根強く反対の方達が残っているという中、まだまだ残りたいという人たちの心について、総務委員会の中では議論があったのかどうか、どのような話がなされたのか。回数も言いながら回答願いたい。

**【高見澤副委員長】**

山口村の今までのしこり等の問題については加藤村長も「新しい地域の村づくり委員会等と共に地域づくりのためにこれからを束ねていきたい。反対されてきた皆さんとも心を開いて話し合っていきたい。」と強く述べていた。大山市長も「未来志向の新市に向けて、旧市町村のもつ個性をしっかりと反映させて多様性の中で統一を目指していきたい。」と力強く述べていた。委員会等の活動等の問題については、提案者の宮澤委員から、説明の中に数々触れている。

## 【要旨】

一生懸命という言葉がある。昔は一所と書いていた。定着性の強い日本人は自分の住む土地を長い間命をかけて守ってきた。われわれは県会議員であり、県という単位の中でその土地を守る任務を負っている。その長野県の一部が他の県に奪われる、更にそれが引き金となって県の崩壊が始まるかもしれないという重要な問題について県民の意向も非常に簡単且つ公正の度合いについても問題のある調査のみで、議会での賛否が決められること自体大きな問題である。県民の意思の代弁者である県議会が十分にかかわらず、山口村と中津川市が中心となってタイムリミットを決めて計画を進めるとするのは長野県議会の可決ありきで県議会でも否決されることがあるということをもまったく視野に入れない。このことは長野県議会無視としか言いようがない。まして他県の市長が自分たちで決めたタイムリミットを振りかざして県議会に圧力をかけるような行動を繰り返すのは、長野県議会が、なめられたといっても過言ではない。戦国時代信州は周辺の国々の勢力に分割されいわゆる草刈場として愚弄にあえいだ。中京の大きな経済の流れがわが信州に侵略の一步を踏み出したのが今回の越県合併ではないか。戦国時代に思いをはせるとき経済戦国真っ只中の現在、新たな信州の苦勞の種がまかれつつある。その顕著な例と思われる今回の越県合併に県議会こそが防波堤にならなければならない。たとえ知事が諸手を上げて合併に賛成したとしても、県議会としては反対の立場を明白にするのは県内各地から選出された議員の責務であると確信する。合併の本質が県民に十分理解されていない現在、積極的な反対は一部の住民運動に過ぎないと冷笑する人もいるが、さりとて積極的に賛成する県民は果たしてどれくらいいるのかまったくわからない。私の住む上田市は島崎藤村の歌った千曲川が流れている。その上流小諸市、佐久市は藤村の旅情を観光の大きなポイントにしており、それは今後も大きなメリットを持っている。信州が生んだ文豪が若い日を送った土地、信州という一つのつながりが千曲川に結ばれた地域に、観光に、情緒に大きなプラスになっている。千曲川の流域、少なくとも藤村の千曲川のスケッチに描かれた地域から選出された県会議員が地元へ帰ったとき「俺は積極的に藤村のふるさとを隣県に売り渡してきた」と胸を張って報告できるのか。県の一部が他県に移るということは日本地図の一部が書き換えられるということ。長年同じ国の人、信州人、同県人と認識してきた人が、他県の人になるということ。こんな大事なことは、長野県の人口の本当に小さな部分の村の、しかも全村一致ではない、強い反対運動を残したまま決められてよいのか。過去3年間でこの9月議会までは数回しかこの問題は議論がされていない。その間知事不信任、知事選、県議選などがあった。こうした長野県民県議会不在ともいえる中で、立てられた合併計画の日程に縛られ、私たち長野県会議員は十分に長野県の全県民に説明し、この越県合併の意見を聞かなくていいのか。早急に結論を出すのではなく、更なる議論の深まりを待つべきであり、軽々な議決に大きな疑問を持つ。

賛成討論（自民党）

討論者：平野議員

本議案は知事の責任放棄、義務違反によりやむを得ず我々議員が提案したもの。このことに関し、知事の行為と認識の誤りを三点指摘する。

一つ目、知事が合併反対の意思表示をすることは自由だが、今回のように時間切れ寸前の意思表示、約束違反、責任放棄はむちゃくちゃである。ある意味では法律違反である。せめて1年前に知事は合併反対を表明して、山口村あるいは我々議会を説得すべきであった。

二点目、知事は権利と義務を履き違えている。知事は今定例会中、合併関連議案の提案権を予算の提出権あるいは議会の招集権になぞらえ、自分には提案する権利権限があると言ったが、実は権限は義務とは表裏一体である。予算の提案権は確かに知事にあるが、予算を提案しなかったらどうなるか。即座に長野県は立ち行かなくなる。つまり、予算の提案権はあるけれど同時に義務である。また、議会の招集権は知事にあると書いてあるが、同時に知事は議会を招集しなければならない。つまり、権利権限と義務は表裏一体なのである。知事は地方自治法を自分の都合よく解釈して、地方自治の精神を踏みにじる、これが知事が一番いけないところである。地方自治の精神、民主主義は何かということをもう一度から勉強し直していただきたい。

次に知事は軽井沢を例にとって、越県合併はどの飛び地合併がどの、議員の皆さんは想像力と覚悟はあるかと言ったが、想像力というより妄想に近い話だ。軽井沢の町民が明確に越県合併の意思を明確にしたならば、これはやはり賛成しなければならない。むしろ、知事の方こそ覚悟がない。今回の山口村のケースのように知事が権利と義務を履き違えて無理やり合併を阻止するというやり方は、まさに暴力である。例えて言うならば、中国がチベットを、ロシアがチェチェンを戦車と機関銃で押さえつけるのと全く同じこと。9月定例会と同じ発言をすると、私は心情的にはこの合併には反対である。山口村の人にはやっぱり長野県に残って欲しいが、山口村民が民主的ルールに則ったこれだけ明確な意思の表示を示した場合、私たち議会人としてはこの合併に賛成せざるをえない。

今日の新聞からちょっと引用させてもらう。「46年前の合併問題では小さな村が半分になれ、朝のあいさつすらしない生活が続いた。そんなことを二度と繰り返したくない。だから、問題がこれ以上こじれないように気を使ってきたが、そうした住民の想いが知事一人の権力で踏みにじられた。あるいは46年前の亀裂を修復するための合併、やっと一緒になれると思ったところであの混乱。田中知事は住民とは別の所で議論を進め、小さな村を再び分断しようとしているのではないか。住民の想いを尊重してほしい。」この想いを噛みしめていただき、山口村に一日も早く平和が戻るように、皆様のご賛同をお願い申し上げます。

反対討論（協働ネット）

討論者：田口議員

歴史の奇遇ということをこれほど感じたことはない。私は昭和24年に山口村に隣接する南木曽町、片田舎に生まれて25歳まで育った。そして小学校の3年、4年、5年はほとんど毎年のように先生に引率されて、馬籠そして藤村記念館を訪れ1日楽しく遊んできた記憶が今鮮

明によみがえっている。

その当時、合併賛成の家、反対の家、筆字で書かれた張り紙がそれぞれ一軒残らず張り巡らされていた。そして私の親父やお袋の知人友人もいた。今でも私の知人あるいは高校の後輩等々が住んでいる。平野さんは民主的なルールを言えばそれは認めるとのことであるが、私はどうしても理解ができない。それは例えば世界を代表するといわれたある思想家は「民意とは何か、民意とは常に支配者の思想が支配的」というような本質を突いた言葉を言っている。

今の合併問題をみたときに、日本で大変分かりやすい言葉がある。「寄らば大樹の陰」今の合併の構図を見ていると、全国的に地方都市の周辺から徐々に吸収するという形で小さな町村が合併に追い込まれている。本当に大樹があるならば、私は大いに賛成だが、7百兆円を超える国の赤字財政、日本そのものが赤字再建団体になりうると言われている。そして、今度の合併特例債はそれぞれの自治体を使うかどうかは自由に任されているが、おそらく今の試算では20兆から30兆円、この合併が進めば使われ新たな借金ができる。つまり寄らば大樹の陰の大樹の中身が虚になりつつある。そして単に民意あるいはまた多数決という常識の制度は、真に私たちの心を豊かにするものであるかということは歴史が証明する。その土地の風土、歴史文化あるいは先生方から教わった教育、たった一つの友人が投げかける言葉等々によって人間が自己を自覚し、人生の大事なときの判断になるかもしれない。

私はこの問題について大いに反省しなければならない。この問題、当初木曽郡は一つ、木曽市構想というものがあつた。その時の会長は加藤出氏であった。この構想は議論が始まる前に破綻をしていた。加藤村長自らがこの会の責任を放棄したのである。そしてその過程の中で、木曽市構想は崩れ、木曽郡は一つという、いわば精神的な瓦解が始まってしまった。

しかしそれでも信州木曽路そして長い歴史を持つ街道文化を守らなければならないというのが信州人の気概であるし、それこそが私が評価され私自身の人生を築いているものでもあるというふうに思っている。長野県議会、あらためて信州というものをもう一度しっかりとその歴史を振り返る、己の問題としてどうか委員長報告に対しては勇気を持って反対をしていたことが山口村の全ての村民の利益を代表する、合わせて長野県220万人の利益を代表するというふうに考える。

賛成討論（志昂会）

討論者：柳平議員

この問題は9月定例会直前になり、知事が関連議案の提案を見送って以来、様々な物議を醸し出し、また3ヶ月に及ぶ時間を費やし、そして多くの村民県民に迷惑をかけてきた。今議会の紛糾の原因でもあるが、この問題を考える時、原点に返れば答えはただ一つであり、山口村の意思、これが何よりも一番に尊重されなければならない、されるべきはずであるということである。地方自治は憲法により保障されており、第93条に「地方公共団体には法律の定めるところにより、その議事機関として議会を設置する」とある。故に、都道府県また市町村に議会が設置され、その議会において住民の代表による代議によってその団体の意思が決定されるわけである。また、住民自治、これは団体の構成員である住民が住民により住民のために行う

もので、当然住民の意思が反映される。これが自治権であり、これが侵害されることは認めません。山口村村民が村民により村民のために決めた村民の意思、これが中津川市との越県合併である。また山口村議会がその団体意思として決定した越県合併。この意思こそが何よりも優先され、尊重されねばならない。合併に賛成の人、合併に反対の人、それぞれの村民が共に悩み、考え抜き、やっと出された結論が合併への道である。たとえ険しい道であっても、自らが選択した道を責任を持って歩いていかなければならない。その思い、そこに住む人たちのその覚悟に勝るものはないと考える。その覚悟を越えるものはないと考える。馬籠の輝き、それは中津川市になったらその輝きは失われてしまうのか？信州木曾馬籠が育んだ藤村は、いつまでも馬籠の藤村として、そして日本の藤村として、信州人のそして日本人の心に必ず生き続けるだろうということを確認し、山口村の越県合併に賛成の討論とする。

反対討論（あおぞら）

討論者：林議員

そもそも、平成の大合併は自主合併とは名ばかりで、国の財政危機を地方へ転嫁するために、期限をきっての合併特例債による強力な誘導政策の推進である。昨日の新聞報道によれば、山口村の加藤村長でさえ「平成の大合併がなければ、今のままで良い」と言っている。政府は地方自治体の固有の財源である「地方交付税」を一方向的に削減し、合併を推進する市町村長に「合併しなければ財政的に破綻する」と、異口同音に言わせつづけている。アメであるはずの特例債とても住民の税金であり、さらに借金を増大させるもの。19日の信濃毎日新聞に、県内に在住の又は出身者である作家など15名の著名人が、連名で意見広告を出した。その中で、「私たちの誇るべき信州では、長い歴史と尊い文化に基づく固有の風土が各地に刻まれており、山口村の馬籠宿を始めとして、今なお残る美しい風景も、そこで誠実に暮らす人々もわが信州の共有財産である。私達は、今一度ふるさと信州への愛情を確認し合うためにも、冷静に立ち止まり、次代を担う子供達に喜んでもらえる決意を示そう」と広く県民に呼びかけている。これは単に、感傷やセンチメンタリズムでもなく、現時点での県民共通の思いではないか。山口村は藤村の生まれた地でもあり、そのふるさとがなければ島崎藤村のすばらしい作品も生まれなかったかもしれない、と風土の持つ力の大切さを語っている。終戦後まもなく、藤村記念堂建設の話が始まると、村人達がこぞって資金を集め、労働奉仕で完成させたと言われている。その門を歩いて行くと、血につながるふるさと、心につながるふるさと、ことばにつながるふるさと、と書き記されている。これは、藤村が昭和3年に馬籠の小学校で講演した時の言葉である。藤村はかぞえて10歳までしか馬籠に住まなかったが、このふるさととの結びつきは深いものがあった、と語られている。それは藤村の生家が、初めて馬籠の土地を開いて住みついた木曾氏の家臣、島崎重通以来、17代にわたって続いた旧家であり、300年余続いてきた生家への思いと、失われつつあるふるさとへの強い愛着と回復への悲願が、歴史小説としても評価の高い「夜明け前」を書くに至ったのではないのだろうか、と藤村の研究を続けて来た山室静氏は述べている。遅きに失した感はあるが、知事提案の越県合併にかかわる1万人の県民意向調査を多数で否決した9月議会以来、山口村の住民のみならず、県民が改めて越県合併について考えさせられ



てきた。この間、あおぞらでは県境の町村を訪ねたが、北山議員が過日紹介したように、臼田町の馬坂では昭和の大合併の時に85%の住民が群馬県への合併を望んだものの、15%の反対者がいたため、「こうした重大な問題は全員の賛成がなければ決めるべきではない」として、以来長野県民として営々と暮らしている。山口村では平成13年5月に合併研究会を設置して以来、説明会や懇談会が数多く開かれてきた。そして今年2月22日には投票方式による村民意向調査が行われ、合併賛成が971票、反対が578票の結果であった。常識的に考えれば、村民が中津川市との合併を選択したことになるはずである。しかし意向調査の結果を反対派が何故受入れないのか、考えてみなければならない。私達もこの間2回、山口村を訪ね多くの村民の皆様の話聞いてきた。その中で明らかになったことは、通常選挙の2倍を超える不在者投票があったことが示すように、お年よりの皆さんへ合併賛成へのさまざまな働きかけがあったこと。二つ目に、「自立は自滅する」との財政シミュレーションを示し、公正な住民判断ができる十分な資料提供がなされなかったこと。三つに、農協や学校がどうなるのか、具体的な検証がなされなかったため、今までの説明と異なる問題が生じる等、あまりにも公正さを欠いた手法で意向調査がなされたことなどを指摘せざるを得ない。しからば、合併の最終判断は誰が行うか。手続上は県議会か。それはそこに住む住民自身である。しかし、県境を越える唯一の合併である山口村の合併は、他の県内合併と異なる要因を含んでいることは間違いない。山口村は長野県民のかけがえのない大切な財産であり、今なお多くの県民が、信州に留まり一緒に歩んでほしいと心から願っている。私は山口村の皆さん方がこうした県民の願いや思いをしっかりと受け止めて、改めて判断をしてほしい。そのために今一度立ち止まり、県もできる限りのサポートを行い、越県合併した場合、自律の場合のいつわりなき財政シミュレーションを示し、農協や学校など想定される全ての課題について客観的に検証し、判断材料を十分に提供する必要がある。その後、公職選挙法に基づいた住民投票によって、合併か自立かの結論を出し、この結果については合併賛成派も反対派も真摯に受入れることこそ、将来に禍根を残さない民主的な道筋である。越県合併という岐路に立ち、後世の歴史の検証に耐え得る、まちがいない判断が求められている。

賛成討論（協働ネット）

討論者：小原議員

最初に、この議案は知事提案をもって議論すべきものだという思いは変わらない。山口村ではこの間の長い時間を通して村の意思決定がされてきた。住民自治の結果を認め合うことが肝要である。これは、自治体の中における意思決定、そしてそれは県内であっても同じことである。私達はその住民自治を決定する段階において、意向調査やあるいは住民投票に一生懸命取り組んで、その民意の形成に向けて一生懸命努力をしてきている。それは一つの単位的意思決定をするために、住民参加の下にそれぞれの結果を求めて取り組んできたものである。その結果を尊重することはごく当然のことであり、私達はその住民自治の結果を保障する立場にある。これまでの知事答弁は、長野県やあるいは信州を護るというそのために、一つの自治体が決めてきた住民自治の結果をどうするのかという質問に対しては、全く答えて

いない。その代わりに、長野県を護るという視点のために、民意があるいは一つの自治体の意思決定が押しつぶされているということに対して、何の説明もない。これは、基礎自治体の上に県があって、お上の威光として断じて許さんというその姿勢に思えてならない。ここには住民の皆さんの意思をみんなが理解するという視点は、全く見受けられない。私は、50年前、宮田村の地で分市あるいは合併という歴史の変遷の中で、子供同士やあるいは大人の世界も口をきかない、あるいは買い物に行かないというその歴史をみてきた。その3年後に山口村の状況を記憶をしている。合併には大きな混乱が生じることは私も承知をしているが、そのことは外からの軋轢によって一層増幅をされ、こうした状態が長期化されるということは、なおさらその対立を深めていくということも承知をしている。その意味で早急な問題解決が今求められている。そのために議員提案という変則的な方法によって、粛々と手続を踏んで行くことこそ大切な私達の課題である。そして同時に馬籠あるいは妻籠、そして中山道という共通の課題をもちながら、それぞれ委員長報告にあったように、新たな連携と新たなまちづくりをみんなで支えあってみんなで作り出していくことこそ、これからの新しい地域づくりに求められる姿だろうと思う。

#### 賛成討論（県民クラブ）

討論者：村上議員

私は地元木曾郡選出の県会議員として、本日午前3時に宮澤敏文議員より議案が上程された時、正直なところようやくこの日が来たという気持ちと、とうとうこの日が来たという複雑な気持ちがあった。しかし、私は山口村の合併問題が昭和30年代の旧神坂村の分村合併という厳しい時代を経て、今日に至るまで半世紀にわたり、山口村の人々の気持ちの中に表れては消えて、消えては表れ、まさに忘れることができない越県合併がここに一旦解決する形が取れたのは、歴史の節目や峠と言われる中で村民の皆さんがやっと落ち着くことができる時が来たという思いである。昨年の今ごろは、私は越県合併には反対の立場にあった。そしていかに村を自律させるかを山口村の皆さんと考え、行動してきた。山口村の皆さんには木曾から出て行って欲しくない思いが強かった。しかし、越県合併の反対派の住民感情が昂ぶる中、どうしてもいつか村の方向を決める時が必要と思い、投票による住民意向調査が村民の納得する中で本年2月22日に行われた。その投票結果は大差で越県合併と決まった。私はこの結果を真摯に受け止め、合併賛成と方向を転換した。今でも山口村の皆さんには残って欲しいが、本当に苦渋した選択で住民が決めたことであるから、それに従うことにした。文豪島崎藤村の末えいの馬籠に住む島崎黎子さんが、「島崎藤村という大きな存在が時に大きな力となって私たちを励まし、ある時は私たちを押しつぶそうとする時がある。今、馬籠宿に新しい風が吹くことが必要である。市町村合併の中で、それに翻弄される山口村の人々が一日でも早く平穏な気持ちで生活できることを願っている。」と言っていた。山口村の人々の苦渋の選択の中で、中津川市との合併を決めたのは勇気ある決断だと思う。山口村の皆さんの英断を尊重して、実現をしていくのは私たち行政を担う人間の仕事である。合併後、合併に賛成の人も反対の人も、またいろんな考え方を持っている人も、今この瞬間、お互いに山口村に住んでおり、また永遠にこの地で生

活していく。文豪島崎藤村が9歳までこの地で生活し、東山魁夷がこの地を通り、村民の暖かい励ましを得ながら画家としての礎を作ったところである。こんな素晴らしい山口村をこれからの時代に合った地域にしていくのは、私たちの責務である。市町村合併という現実を目の前にして、県内合併、越県合併に関わらず地域の将来像はその地域に住む皆さんによって責任を持って決めれば良いのであって、それが住民自治の根幹である。山口村の越県合併は、昭和30年代からの悲願であり、今回昭和33年の神坂村の分村合併によようやく終止符を打つことができる。中津川市との合併は住民意思の中で、既に昭和の分村合併から芽生えていたもので、越県合併は村民にとってごく自然な流れとしても過言ではない。今回決着を付けなければ再び歴史は逆戻りして、住民の日々の生活に生きがいさえ見出すことがなくなる。山口村の静かな山村に住む皆さんが越県合併賛成派、反対派として対立構造をもうこれ以上作るわけにはいかない。知事や県議会は山口村や山口村村民の生命、財産を守らなければならない。どんなことがあろうとも山口村を今救わなければ山口村は分裂する。私たち県議会が守らなければ誰がこの村を救うのでしょうか。今回9月定例議会から12月定例議会に際して、山口村住民のうち越県合併賛成派、反対派の多くの住民が県庁に来ている。山口村の皆さんが本当に安心してこの地域に誇りと生きがいを持っていくには、やはり村民が苦渋の選択で決めた越県合併をすることである。山口村の悲劇を繰り返すわけにはいかない。今、山口村の分村合併から46年の歳月を経て、夜が明けようとしている。是非とも県民の総意で山口村の夜明けを実現させていただきたい。そして気持ちよく山口村を中津川市に送り出させていただきたい。

最後に知事は、今回仮に合併関連議案が議決された時には速やかに総務省に申請をしていただきたい。

#### 賛成討論（政信会）

討論者：向山議員

市町村の越県合併については地方自治法及びこれに基づく解釈によれば、第一点目として、越県合併に係る県の総務大臣への申請については、市町村は知事へ請求する旨が記されている。第二点目は、越県合併の場合には県議会の議決でその是非を決定することが条件付けられている。第三点目は、県の申請に基づいて総務大臣がその可否を決するという。これに基づき、山口村は知事に対して越県合併に係る申請書を提出したのであり、県においてその是非を決する権限を有するのは県議会であるとすれば、知事として議案を提出する義務があるのは明確であり、行政事務執行者の立場として、知事は議案として議事に付すべき事柄を議会に提出しなければならない義務がある。このことから、議案提出を拒み続けた知事はその義務違反に当たるのであり、これは地方自治法の趣旨を歪め、議会制度そのものを崩壊せしめんとする、極めて危険な行動である。それ故わが党派政信会は、このたびの議案提出はあくまでも知事の責任と義務であるとの考えを貫き、今もってその考えは何ら変わらない。今回未提出が確定されたことは残念である。地方自治法の趣旨を歪め、議会のルールを踏みにじった一連の手法は長野県政上の汚点として、その残した傷は深いとしか言い様がないが、数年間にわたり苦渋の道のりを歩んできた山口村の実情に想いを致せば、村の混乱による不安や苛立ち、家族や

子供たちへの様々な悪影響が生じることを知るに、これをそのまま放置するわけにはいかない。これまで、山口村や中津川市が築きあげてきた暮らしの自治を踏みにじることも許されない。地域の主体性と自立性が発揮される地域主権社会を実現していくために、住民にもっとも身近な市町村自治が最優先されることは言うまでもない。県と市町村は対等、協力の関係と言われ続ける知事自らの発言に、深い自覚と責任を持ち、混乱をさけるためにも、山口村民の意思を十分に尊重し、今こそ知事の全責任をまっとうすべきである。山口村の手続は民主的に進められており、民主主義のルールの上からも県民である村民の総意として、民意を重く受け止め、議会ルールを尊重した、本提案に賛成を表する。この上は、この議案が可決されたならば、その事実を知事は厳粛に受け止め、知事の全責任として間違いのない判断と行動を起すべきである。

賛成討論（公明党）

討論者：牛山議員

本年1月山口村の女性から山口村と中津川市の合併についてどう考えるかとの電話をもらった。「住民意向調査を控えて合併推進、反対の双方から話を聞いている。地域の中でもいろいろ意見があるので自分としてどうしていいかわからない。」なかなか電話を切られない様子に、本当に苦悩している様子が伝わってきた。そして「前のことがあるので、しこりは残したくないからね。隣近所とは仲良くやりたいもの。」とも言われたが、これは村民共通の願いであると思うし、私どもも同じ思いで関わってきたつもりである。

今回の合併については平成13年5月に市町村合併研究委員会を設置して以来、山口村としてできる限りの情報公開、説明会、懇談会、アンケート調査や住民意向調査等民主的な手続を経ながら丁寧に進められ、この点については他の合併事例と比べても際立っている。その上で今になっての知事の「長野県民であり続けたい人を守りたい」の繰り返し発言は、県の最高責任者としてのこのような対応で、これ以上村民に無用の混乱を起こさせてはならないと強く申し上げたい。何故なら昭和33年の村の分断の悲劇を繰り返してはならないと思う。悪夢の原因は多数の神坂村住民が中津川市との合併を望む中で当時の長野県議会が否決したことから端を発した。神坂村は賛否両派が入り乱れ、激しいいがみあいが続いた。住民間のけんかは勿論、デモ行進や座り込みが行われ、警察の機動隊まで出動し、それぞれの家の玄関先には賛成反対の表札まで掲示されたと聞いた。そして国の裁定により分村合併が決まると、反対派の家庭の子供たちは今まで通っていた学校に通学できなくなり、寺子屋学校を強いられる等、この紛争により村には大きなしこりが残ってしまった。この歴史的教訓を決して忘れてはならない。神坂財産区の事件や、簡易水道敷設事件等の当時の新聞記事を見ると生活の細部にわたり、いかにしこりが根深いものか伺え、そのしこりは今も人々の心の中にある。

これらを踏まえた上で、村として村民の民意を最大限に尊重しながら合併の手続を推進されてきたと私どもは認識している。そして平成13年9月南木曾での3町村長との懇談会で、越県合併について住民の自主判断でまとまった場合、知事の考えはと加藤村長から問われて知事は「県と市町村は対等である。村民の方がどのように判断なさるか、それは民主主義でござい

ますので、村民が選択なさること。皆さんのご選択に関しては、制約を与えるようなことは私はずべきでない。」と答えている。それ以後も本年9月まで知事自ら情報の開示や住民へのアンケート等も提案されたり、県のまちづくり支援室を通して、一貫して合併に向けての支援体制を作ってきた。これだけ越県合併について理解を示した知事が、突然9月、そして今12月議会にも議案提案をせず、最近では合併反対の発言さえしている。私どもは過去の山口村の皆様が味わった苦汁の経験を再び繰り返してはならないとの決意で今回の中津川市との合併についての山口村の決定を真摯に受け止めていかななくてはならないと考えている。その意味で知事が議案を提出しなかったことが、これから過去の知事の発言また対応との整合性も含めて、村民同士の対立を深めている。

ドイツの哲学者カントの言葉にもあるが、人間を手段にするのか、人間を目的とするのか、そこに一切の分かれ目がある。人間を目的とし、人間への信頼を根本にして、人間を結合し、その可能性を引き出させる方向へ導き出すのか、それとも人間に対する不信を根底に人間を分断し、人間を手段としてその可能性を閉ざしてしまうのか。どんなに高邁な理念や政策があったとしても、それを実行する人間の人間観が正しくない限り、現実はずまく運ぶことはない。私はそこにこそ、人間信頼に根ざしたリーダーシップが絶対に必要とされる理由があると思う。歴史の大きな転換点であって、重大な覚悟、そして責任、その重圧をひしひしと感じながら私もまた今ここに立っている。

今、山口村の中では賛成反対の立場に分かれての葛藤があるが、どちらの立場にしてもこの地域をより良いものにしていきたい、幸せになりたいとの思いは同じである。この双方の思いを地域発展のエネルギーにどう集約していくのか、今後の知事のリーダーシップ、行動一つにかかっている。知事の英断を望む。村民の民意に基づき村から合併申請が出ている。議決後知事が速やかに国へ申請されることを強く要望する。

#### 賛成討論（共産党）

討論者：石坂議員

改めて確認しておかなければならないのは、それが越県合併であっても、県内合併であっても、その自治体が合併の道を選ぶのか、合併せずに自立の道を選ぶのかは、あくまでそこに住む住民自身の責任において決めることであり、住民が選択した結論は尊重されなければならない、ということであり、この原則が守られなくなれば、市町村が議論を積み重ね、住民投票や意向調査などでいったん決定したことを、知事や県議会の思惑で覆しても許されるということになってしまい、市町村が意思決定をすることの意味はまったく無くなってしまう。そんなことになれば、住民自治や民主主義のルールそのものが吹き飛んでしまい、大混乱である。

第一法規出版の注釈「地方自治法」によれば、「関係市町村から廃置分合または境界変更の申請が提出された場合には、都道府県知事はその形式および内容について審査し、都道府県議会の議決を経ることになる。申請に瑕疵がある場合や、廃置分合が適切を欠き、または不合理である場合に知事が独自の判断で都道府県議会の議決に付さずに握りつぶすことができるかどうか問題になる。行政実例および下級審判例は積極的に解しているが、この見解には疑問が

ある。軽微な瑕疵について補正を命じたり、申請そのものに重大明白な手続き上の瑕疵がある場合に手続きのやり直しを求めたりすることはできると解してよいが、廃置分合の政策上の不適正や合理性の判断については、知事が意見を付して議会の議決にゆだねるべきものと解するのが妥当である。」としている。

知事自らが合併重点支援地域に指定し、職員を派遣して財政シミュレーション作りや事務手続きの準備を応援し、賛成・反対の両派が納得のうえの投票方式による意向調査の結果合併賛成が多数となり、議会の議決を経て県に申請があげられてからすでに8ヶ月が経ち、その申請は異議があるとの具体的な知事の意味表示もないまま、むしろ合併に向かつての事務手続きや合併を前提とした子ども達の交流が日々進む中で、村からの申請は事実上放置されてきた。

議員提案の議案が付託された本日の総務委員会で、私は、出席いただいた山口村の教育長に、申請が上がってから今日までの間に、知事からの明確な意思表示さえあればここまで進まなかったであろう子ども達の交流の実態と、すでに心は中津川市へと向いている子ども達の気持ちだが、もし今、知事が総務省へ申請しないことになり、8ヶ月前に戻れるのかどうかを聞いたところ、教育長からは、そんなことはとても子ども達に説明できないことであり、中学校へ進学する子は制服をどうしようか、修学旅行の行き先も決められないと苦悩の答弁をされた。

「少数であっても長野県民であり続けたいという人々を、県知事として護らなければならない責務がある。」「葛藤し続けている。」という無念の思いがあっても、もう、これ以上の引き伸ばしは道義上許されない。

提案説明の中で、財政シミュレーションについてのお話があったが、財政シミュレーションはあくまで、その村が描く将来の自治体の姿、つまり、その前提条件をどう決めるのかでまったく違うものになる。地方交付税や各種補助金の大幅削減でますます厳しい財政状況の中で、全国どの地方自治体も大変な苦勞をしており、合併特例債を条件に、期限を区切ったのいわゆる「平成の大合併」に、私は基本的に反対である。特例債がソフト事業には使えず、結局は借金であることから、合併したからといって、必ずしもばら色の未来ばかりとは言えず、山口村と同等、むしろ財政力指数はかなり厳しい自治体でも合併しない道を選択しているところもある。しかし、そのどちらの道を選ぶのかは、あくまでそこに住む住民であり、財政力が厳しくても自立を選んだ、泰阜村、栄村、その他の村々は村民自身が自立を選んだのであって、決して知事や県議会が自立を決めたり押し付けたのではない。

合併に賛成の村民が多数であるという現実のもとで、賛成、反対の住民が、あくまで心を開いて話し合い、その結果として合併はやはり考え直したい、反対したい、長野県に残りたいという村民の多数派が、村の中で作られない限り、どんなに村の外で、山口村への思いを寄せる署名が沢山集まろうとも、外からの力で村民の将来を決めることはできない。

「寄らば大樹の陰」と田口議員は言ったが、同じ村に一緒に住む人たちで自らが多数派を形成することをあきらめて、知事の権限に「寄らば大樹の陰」と結論を頼ることで、本当の自立が、村民の幸せがあるのか。

19日付けの信濃毎日新聞に意見広告が載った。私も尊敬する井出孫六さんをはじめ優れた文

化人の、そして良識ある皆さんと思われる。しかし「失いたくない 信州人の宝。 藤村の山口村を救うことは長野県を救うこと 山口村を失うことは 長野県を失うこと」尊敬すべき文化人の意見には、賛同できない。山口村は、藤村は日本の財産であり、山口村は決して文化人の持ち物ではない。

今ここに、苦悩の中からのぎりぎりの選択として、本来知事の提案によるべきこの議案を、議員提案という異例の形で提案せざるを得なかった、提出者、賛同者となった私たち長野県議会議員一同は、決して自ら好き好んでこの議案を提案、賛同するわけではないが、好むと好まざるとにかかわらず、今この歴史の瞬間に長野県議会議員である私たちは、山口村や島崎藤村への思いや、「平成の大合併」に対する賛否や見解の違い、立場の違いをこえて、村民多数が自らの意志で選んだ道、住民の意思、住民自治を尊重しなければならないという一点で一致している。

本来の提案者である知事からのご提案が未だ出されない以上、地方自治法で認められた議員としての権限を使い、最大限の努力をすることが私たちの責務である。

本日の総務委員会で最後に、もしかしたら長野県木曾郡山口村最後の村長になるかもしれない加藤村長の挨拶を聞きながら、私は様々な思いが駆け巡り涙をこらえることができなかった。長野県民である山口村の人々が岐阜県民になるかもしれないことに身を引き裂かれるような思いがしない県民はいない。しかし、それが村民多数の選択であるならば、それを尊重し、この県議会の議場で領土や財産の分捕り合戦のような声を荒げる争いはもう止めたい。例え岐阜県民となっても、山口村の歴史や文化を引き継いで、どうか幸せに暮らせるよう、そしてこれだけ議論した越県合併の議論のこのよい機会に両県の交流と友好を一層深めたいと心から願う。